

扁桃周囲膿瘍のCT画像とその臨床的特徴

馬越瑞夫 大堀純一郎 黒野祐一

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

【目 的】扁桃周囲膿瘍は扁桃被膜内あるいは被膜と咽頭収縮筋間隙に発生すると言われているが、その発生機序は未だ明確にされておらず、また画像検査上の特徴についてもあまり検討されていない。そこで膿瘍の局在部位をCT所見で分類し、その臨床所見を比較検討した。

【方法と材料】2005年から2009年までに、当科にて扁桃周囲膿瘍に対し即時及び待機扁桃摘を施行した症例を対象とした。全症例に術前造影CT検査を施行した。当科受診前に、前医にて膿瘍穿刺や膿瘍切開排膿を施行した症例は除外した。

【結 果】対象となった症例は79症例で、平均年齢は40歳であった。CT画像から膿瘍の局在部位を扁桃被膜内、扁桃被膜外、混合型の3部位に、そして膿瘍の形態をオパール型(O type)、キャップ型(C type)の2型に分類した。48症例がCT画像にて扁桃被膜内膿瘍と診断され、17症例が扁桃被膜外膿瘍、13症例が両者の混合型と診断された。扁桃被膜内膿瘍の95.7%がO typeの膿瘍形態を示し、扁桃被膜外膿瘍の82.3%がC typeの膿瘍形態を示した。また術中に得られた病理組織標本についても併せて検討した。

【考 察】扁桃周囲膿瘍は被膜内に発生する頻度が高くCT画像上はO typeを示すこと、そして被膜外に発生した膿瘍はC typeを示し被膜外間隙に波及しやすいことが示唆された。